

『イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。10 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した。11 そこでまた、ほかの僕を送ったが、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせないで追い返した。12 更に三人目の僕を送ったが、これにも傷を負わせてほうり出した。13 そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうでしょうか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』14 農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』15 そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。16 戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」彼らはこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。17 イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』18 その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。』19 そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。』

### 【説教】

本当に大切なものを、そうとは気がつかずに、人は捨ててしまうということがあると思います。今日の聖書の言葉は、そのようなことを考えずにはいられないと思われまます。

今日の聖書の言葉は、イエスさまがぶどう園の譬えをなされたところが記されています。ここでは 4 回にわたり、ぶどう園の主人が僕を送り、自分の愛する息子まで送るのですが、しかしそこを任されていた農夫たちは、その訪問を拒絶してしまいました。そして、結果的にそのぶどう園は取り上げられ、他の人々に与えられてしまいます。このように、自分たちの行動の結果が、いったいどういうことをもたらすのかが初めからわかっていたのなら、その行動を改めることが出来ます。しかし、私たち人間は、ちょっとした未来のことでも、予想したり想像することを、なかなかしないというところがあると思います。今の現実にも目を奪われてしまい、大切なことを見失ってしまうということがあるのですね。

この譬えの中で、主人の使わす人々を拒否した農夫たちは、一時でも自分たちが大いに繁栄することを望んでしまいました。そのことで、返って持続的な生活して行く基盤を失ってしまいます。このぶどう園は、主人に借りていたのですから、農夫たちは手間賃の分を受け取ることで満足して、後はちゃんと主人に返すことが出来れば良かったですね。そうすれば、また継続的にぶどう園を借りることが出来て、この地上の生活をそれなりに楽しむことが出来るのです。強欲とか貪りという人間の思いが、いかに危険なものなのかを良く物語っている譬えだと思います。

そして、このことが信仰ということに関わることであったのなら、私たちはどう聴くことが出来るでしょうか。このイエスさまの譬え話を聞いていた人々は皆、旧約聖書をよく読んでいた人々でした。ですので、この譬えのぶどう園が何を指しているのかを知っていましたが、それはイザヤ書やエレミヤ書

に出てくるのですが、イスラエルの信仰を与えられている人々、神の民のことを指しています。ですので、農夫たちというのは、神さまから**借りた**信仰を、自分たちというぶどう園で養い育てることで、豊かなぶどうの実をもたらす人々だということです。この、信仰というのは神さまから**借りている**という点ですが、これはかなりギョツとする言い方をイエスさまはされています。「貸しているのだから、その実りを私が受け取るのは当然だ」と、神さまの立場を良く現した言い方をしているわけです。ただ、その実りをしっかり神さまにお返しすることで、より豊かな神さまのみ言葉を持続的にさらに増し加えて与えて下さいますので、欲張らずに自分のものだけにさえしなければ、さらに自分というぶどう園を用いて沢山の実に預かれるわけです。よって、神さまにその信仰の実りを返さないということは、自らその関係を絶つことによってみ言葉の供給源を失うことを意味しています。

そして、その場合、ぶどう園の主人が送る僕たちというのは、その神さまのみ言葉を運ぶ、イザヤやエレミヤといった預言者たちのことを現しています。イスラエルの民は、その預言者たちに酷い仕打ちをして、実際にその言葉を拒否し続けてしまいました。そして、イエス・キリストという神の愛する息子が最後に送られたのですが、しかしそれも結局、十字架に付けて殺してしまいました。彼らは、本当に自分たちの生活にとって大切なものを、自らの命を真の意味で生かし救ってくれるものを、捨ててしまったのです。イエスさまの弟子の一人、パウロがこういうことを言っています。「預言者たちというのは、まだ、神さまのことがおぼろげにしか見えていなかったもので、その語る神の言葉を理解するにはちょっと難しかった。しかし、イエス・キリストは完全に神そのものを体現した方であったので、その語る神の言葉が不十分だとは言えないのだ。」というようなことを言っています。つまり、「イエス・キリストを拒否する側に、その責任がありますよ」、ということです。ですので、この譬えを聴く時、イエス・キリストがもたらすみ言葉の中に、私たちの命にとって、人生に於いて、珠玉の宝物があるのだということを、今一度覚えたいと思います。

では、その聖書の中の宝物ということですが、実際今日の聖書の言葉の中で見てみると、どのような大切なメッセージがあるのでしょうか。それは、こういうことが考えられと思います。人々はイエス・キリストを捨ててしまいましたが、しかし、それを拾って、新しい祈りの家を立てる親石にした人々もいるのだとあります(17節)。それは何故かと言えば、人々がイエスさまを捨てたのは、イエスさまに何の価値もなかったからではなかったからです。その価値に、人々が気がつかなかっただけなのです。ですので、本当は大きな価値があり、それを見いだす人も中にはいるのです。このことは、私たちの生活、そして人生に意味を与えてくれて、励ましてくれる神さまのみ言葉となると思います。人々から良い評価をもらうことなく、簡単に捨てられてしまう人々が、この世界にいかに沢山いるのでしょうか。本当は、慈しみ深いキリストの目によってその人たちを見れば、沢山良いところ、すばらしい才能があるのです。そこを見てもらえることなく、人々に捨てられている人たちは、ちょうど、人々によって捨てられたイエスさまと重なります。イエス・キリストがなぜ十字架に欠けられたのかというのは、捨てられているものの中にも、大切な価値があるということを示すためなのです。

そして、むしろ、神さまのみ心に従って正しく生きたからこそ、イエスさまのように捨てられてしまうという点に、さらに考えを進めることが出来ます。世の中の不正に荷担することは出来ない、人を蹴落として自分が上に行くことも出来ない、そういう人というのは、世間では要領の悪い融通の利かない人、向上心のない人として嫌われます。しかし、キリストの目から見れば、その人は真面目に正し

く生きているのであり、とても優しい人なのです。「我々の和を乱すから、おまえはいらない」と、捨てられることも良くあることでしょうが、それこそイエスさまがこの地上で良く受けた仕打ちでした。十字架の時だけでなく、イエスさまは本当のことをどこでも勇気を出して語りましたので、力を持つ人々から良く捨てられて、町や村から出て行くしかなくなりました。それは、弟子のペトロたちや、特にイエスさま以上にイエスさまの価値を高く評価したパウロのような弟子たちにも言えることです。みんな弟子たちも、町の有力者やそれに従う住民たちから捨てられたのですが、返って彼らは喜びました。それは、イエスさまと同じ扱いを受けるまでに自分は近づけたのだと喜んで神に賛美したのだとあります。この捨てられる苦しみは、少しでもキリストに従って正しい生き方が出来ていることの証拠なのだと、自信をもたらすものとなりました。

人の目には、意味のない無益なものであっても、大切な真の意味を掘り起こして宝物として輝かせてくれるのが、神のみ言葉です。その神のみ言葉の中心が、イエス・キリストなのです。そこでもう一つ、この譬えの中の宝物として、次のように聞くことが出来ると考えられます。この譬えの中で、主人は何回、寛容さをもって農夫たちに歩み寄ったのかというところですか。それは、4回ですね。忍耐強く相手に働きかけるのは、4回もすれば十分だということ、ここから読み取れると思います。「3度目の正直」という言葉があります。それは、1回2回なら誰でも間違ってしまうことがある。だから、3度目に正しい判断をすればそれで良いというもの。それに加えて、この譬えは、その3度目の正直ささえも大目に見て、もう一度、余分に自分の方から関わろうとするものです。それでも相手が拒むなら、それ以上無理をしなくても良いですよということです。自分の責任はここまでだと、後は相手の責任に任せれば良いのです。神と人との責任を分けることが大切のように、人間同士の間においても責任を分けて分担することの大切さも教えているのですね。

自分がどこまでやらなくてはいけないのかその限度がわからずに、延々とやらなければならないというところに、私たちの苦しみの一つがあると思います。「私が出来たことはここまで、そこはあなたの責任でやらないとダメですよ」というのは、冷たい対応なのではなくて、相手の人を一人前の人間として認めているからなのです。なんでもやってあげるのは、相手を子ども扱いしていることになり、何か馬鹿にされているように相手を感じることになりかねません。相手に自分の責任を負わせて、うまく行こうが行くまいが、じっと見守り続けるというそういう愛の形もあるのですね。

このように、イエス・キリストという神の言葉は、時代が移ってもそこに住む人が人間であるならば、以前と変わらず大変貴重な宝物だと私は思っています。しかし、いつの時代も本当に大切であるからこそ、捨てられるということもあるわけです。イエス・キリストの価値が少しでも人々によって気がつかれますようにお祈りいたします。